

新相撲の開催とその隆盛  
～北海道の二つの女相撲大会を見て～

Holding sumo wrestling and the prosperity  
—Two woman sumo wrestling rallies of Hokkaido are seen—

下川隆司\*, ニツ森 修\*, 屋田敏弘\*, 小山泰文\*  
古谷洋一\*, 佐藤和裕\*\*, 下川 学\*\*\*, 下川哲徳\*\*\*\*

Takashi SHIMOKAWA \*, Osamu FUTATSUMORI \*, Toshihiro OKUDA \*  
Yasufumi KOYAMA \*, Yoichi FURUYA \*, Kazuhiro SATO \*\*  
Manabu SHIMOKAWA \*\*\* and Tetsunori SHIMOKAWA \*\*\*\*

ABSTRACT

Women's sumo matches as one of the established custom events are held at Teshikaga Town and Fukushima Town in Hokkaido. When we watch cheerful and active female players playing sumo matches exiting, we don't feel incompatibility and can enjoy genuine women's sumo matches as similar to general matches. When we check up the origin of the matches, we can give the reason as the first one that both towns produced a number of sumo wrestlers of the highest rank and therefore the great numbers of townspeople have a mania for it. And we can give the second reason that the both town are conspicuous by female activity. Shin-sumo started as taking the rising opportunity of the international female activities. Therefore, it seems, that such women's sumo matches as one of general matches have been held for many years suggesting for shin-sumo.

はじめに

先の「体育研究所報」第18巻（平成12年3月25日発行）で、私たちは「新相撲の発足と今後の課題」を発表した。そこでは、新相撲の発足の経緯と今後の課題を探るとともに、わが国における女性による相撲の歴史も考察した。その結果、「女相撲は際物、見世物に過ぎなかった」という、これまでの一般的な見方は必ずしも正しいとはいえず、男性の相撲と同じような取組が組まれた興行

が、少なくとも江戸時代から行われていたことが確認できた。

今回は、北海道で毎年行われている二つの「女相撲大会」を、スポーツ競技という観点に重点を置いて考察した。新相撲はまだ始まったばかりであるが、北海道の大会の一つは30年近い歴史を重ね、もう一つも10年続いており、新相撲の今後を考えると、この二つの大会が何らかの示唆を与えてくれるのではないかと考えたからである。

\* 国士舘大学 (Kokushikan University)

\*\* 道都大学 (Dohto University)

\*\*\* 東京純心女子大学 (Tokyo Junshin Women's College)

\*\*\*\* 杏林大学 (Kyorin University)

## I. 川湯温泉全道女相撲選手権大会

(北海道川上郡弟子屈町)

### 1. 昭和の大横綱・大鵬の出身地

北海道川上郡弟子屈町は、世界有数の透明度を誇る摩周湖を抱く摩周岳の山麓に広がる起伏の多い高燥地帯にあり、東は根室高原、南は標茶町を経て釧路湿原に隣接している。また、町の西部にはカルデラ湖として名高い屈斜路湖がある。町の全面積の70%が山林で、農耕地は少なく、酪農が中心となっている。硫黄山を熱源とした川湯温泉は、硫黄のにおいの立ち込める道内屈指の温泉で、また、町の中心街にある摩周温泉は道東最古の温泉街とされ、弟子屈町には毎年多くの観光客が訪れる。

昭和の大横綱といわれた大鵬は、この町の出身である。昭和59年には川湯相撲記念館が開館し、館内には大鵬の偉業をたたえる品々が展示されている。大鵬は平成2年、名誉町民の第1号となった。大相撲弟子屈場所がこれまで何度か開催されるなど、相撲熱も盛んだ。「川湯温泉全道女相撲選手権大会」が始まったのは昭和47年と古く、今では秋に欠かせない行事の一つとしてすっかり定着している。

### 2. 川湯温泉・女相撲大会の始まり

ホテルや旅館、土産物店や飲食店が並ぶ川湯温泉の料飲店組合では、訪れた観光客への感謝の一環として、以前から観光の閑散期に入る9月の第一日曜日に、歌や踊りのイベントやみこしなどを出して感謝祭りを行っていたが、昭和47年、なにか新しい催しを加えようということになった。当時、横綱大鵬の出身地だけあって、男性の相撲大会は行われていたが（現在は行われていない）、これとは別に、主として旅館の女性従業員が参加できる催しとして、女相撲大会を開催することにした。しかし、参加者は特に旅館の従業員に限ったわけではなく、成人女性なら誰でも参加できるようにし、当日川湯温泉を訪れていた旅行者にも

飛び入りの参加を呼びかけて、第1回の女相撲大会が開かれた。

神事や興行としての女性による相撲は、かつては全国各地で行われていたが、当時、これらはほとんど姿を消しており、純粹に競技としての女性による相撲大会としては、全国的にもこの大会が初めての試みであったとっていいのではないだろうか。

服装は、短パンやTEEシャツ、トレーナーを各自に用意してもらうことにした。会場は感謝祭りのイベントを行っている芝生の催し物広場の一角で、そこに角材で土台を作り、その上に畳を載せて土俵を設けた。

参加者に旅館の従業員が多かったこともあり、試合前に通いなれた川湯神社に必勝祈願のお参りをする人もいた。

試合はトーナメントで行い、優勝を争う形が取られた。選手は東西に分かれ、土俵に上がるとしゃがんで柏手を打ち、それから立ち合った。これはアマチュア相撲の形とほとんど変わらないもので、あくまでも競技としての相撲を行おうという考え方に立っていた。行司（大相撲の行司の服装をした）もイベントの司会者に見られがちな引き立て役を兼ねるといふより、土俵をさばくのに徹した。このときの大会運営の姿勢はその後もずっと変わらず、現在まで引き継がれている。この点、和やかで楽しめる催しに重点を置いた福島町の「南北海道・女だけの相撲大会」と好対照である。

大会に参加する選手は皆、相撲を取るの初めての人ばかりだったのは当然である。しかし、事前に相撲のルールを教えるということせず、実際に何番か試合を行ううちに、選手がそれを見て要領を会得するという形を取りながら試合は進められたが、とくに不都合はなかったようである。

### 3. 川湯温泉全道女相撲選手権大会

その後、大会で大きく変わった点を挙げると、まず、第6回大会から主催者が料飲店組合から川湯温泉観光協会へと変わった。大会が恒例行事と

して定着し、また、女性による相撲大会が珍しいことから、マスコミでも取り上げられるようになったため、観光協会が主催して、さらに盛り上げることにしたのである。

選手の服装も、マスコミに取り上げられたときに目を引くようにと、ユニフォームとしてジーンズの短パンに大会名を記したティーシャツの上下を主催者が用意するようにした（さらしを帯状に巻いて短パンのベルト穴に通して‘まわし’としているのは、第1回大会から変わっていない）。ティーシャツは大会終了後、記念として参加者に持ち帰ってもらっている。

開催する会場は第1回大会から変わらないが、特注の土俵をこの大会のために用意し、毎年この土俵を使うことにした。これはウレタンのマットの土俵で、新相撲の土俵と似ているが、大きさ（直径）がやや小さくなっている。これまで捻挫程度の怪我はあったが、大きな怪我は起きていない。開催に際して、主催者側でスポーツ保険に入るが、それ以上の負担が出る場合を考慮して、各自で保険に入るように事前に呼びかけている。

参加人数については、はじめの頃は飛び入りを中心だったので正確な数は不明だが、最近では80人前後が多く、数年前は100人を超えたこともあった。参加者が地元中心だったのは第10回大会くらいまでで、その後は道内はもちろん、本州や九州からの参加者も出るようになった。当日の朝まで参加の受付を行っているので、たまたま旅行に来ていて飛び入りで参加する遠方の人もあるが、わざわざこの大会のために遠方から参加する選手も出てくるようになったためである。

参加の呼びかけは、道内のテレビにスポットで行ったり、報道関係に予告記事の掲載を依頼している。その他、近隣には新聞折込のチラシを入れているが、最近では定着してきたこともあって、参加の募集にとくに力を入れるということはない。参加の受付は原則として大会の1ヶ月前から受け付けて、8月末日で締め切ることにしているが、特別の参加費用は徴収していない。い

わば、無断でキャンセルが簡単にできるようになっているわけである。主催者にとっては、これが一番頭の痛いところで、何回大会を重ねても、大会当日の朝、どれだけ参加者が集まるか心配だという。そのため、キャンセルを見越して、大会当日の朝の参加受付も行っている。

受付は朝の8時から9時まで。その時間に申し込みに来た人に抽選札を渡し、その結果によってトーナメント表を作るが、運営に携わる人たちにとってこのときがもっとも忙しいときである。

取組はトーナメントで行うので、早々と負けた人はその後の試合に出ることができなくなる。それを救済するために、はじめにA組とB組のクラス分けの取組を行っている。1回戦で勝った人をAクラス、負けた人をBクラスに分け、以後、各クラスでそれぞれトーナメントを行い、優勝を争うことになるが、大会の最終的な選手権者はAクラスの優勝者になるのは言うまでもない。

優勝者の賞金は、はじめの頃は10万円だったが、昭和63年に20万円にアップされ、さらに平成6年の大会から30万円となった（Bクラスの優勝賞金は5万円）。また、2位、3位の現在の賞金はそれぞれ10万円（同3万円）、5万円（同2万円）である。さらに、参加者全員に参加賞として5000円が授与される。協賛している会社や地元の商店から提供される副賞も多数に上り、賞金と副賞の総額では300万円ほどに達する。副賞のうちとくに目を引くのが、優勝者に与えられることになっているポニー1頭だ。昭和61年の大会のとき、マスコミの取材が集まるようになり、奇抜な副賞として子牛1頭を出すことにした。その後、数年前から子牛より扱いやすいポニーが副賞となった。その他の副賞では、女性が対象になることから、掃除機や洗濯機などの家電製品や最近では健康器具などが多くなっている。

こうした豪華な賞金や賞品が出されるため、試合にのぞむ選手の意気込みもたいへんなものがある。取組のはじめのうちは、初出場の選手も多く、立ち合いがうまくいかなかったり、取り組んでも



相手を引き回して、そのはずみで自分から尻餅について負けてしまうような取組も見られる。土俵を裁く行司は大変だが、選手に注意することはほとんどなく、両者の呼吸を合わせて裁くことに専念している。あくまでも競技としての女相撲大会を行っていかうという姿勢である。土俵下では、素人ながら4人の検査役が勝負の判定に目を光らせている。取組の結果のアナウンスも、どちらが勝ったかを告げるだけで、決まり手などのアナウンスはなく、淡々と進められるという感じである。選手の呼び出しも苗字で行い、四股名はつけていない。

試合が進み上位陣の対戦となってくると、大会の常連組が占めるようになり、取組にも力が入ってくる。土俵中央でがっぷり四つに組み合い両者互いに譲らなかつたり、豪快な上手投げで勝負がつく取組も出てくる。さらに、準決勝からは、立ち合い前に四股を踏む動作も加わり、観客の熱気も一段と盛り上がってくる。およそ3000人の観客が狭い園地に詰め掛け、ひいきの選手に声を囁らして声援を送る。

優勝者には優勝旗が授与され、翌年の大会に優勝旗が返還されるという形が取られている。

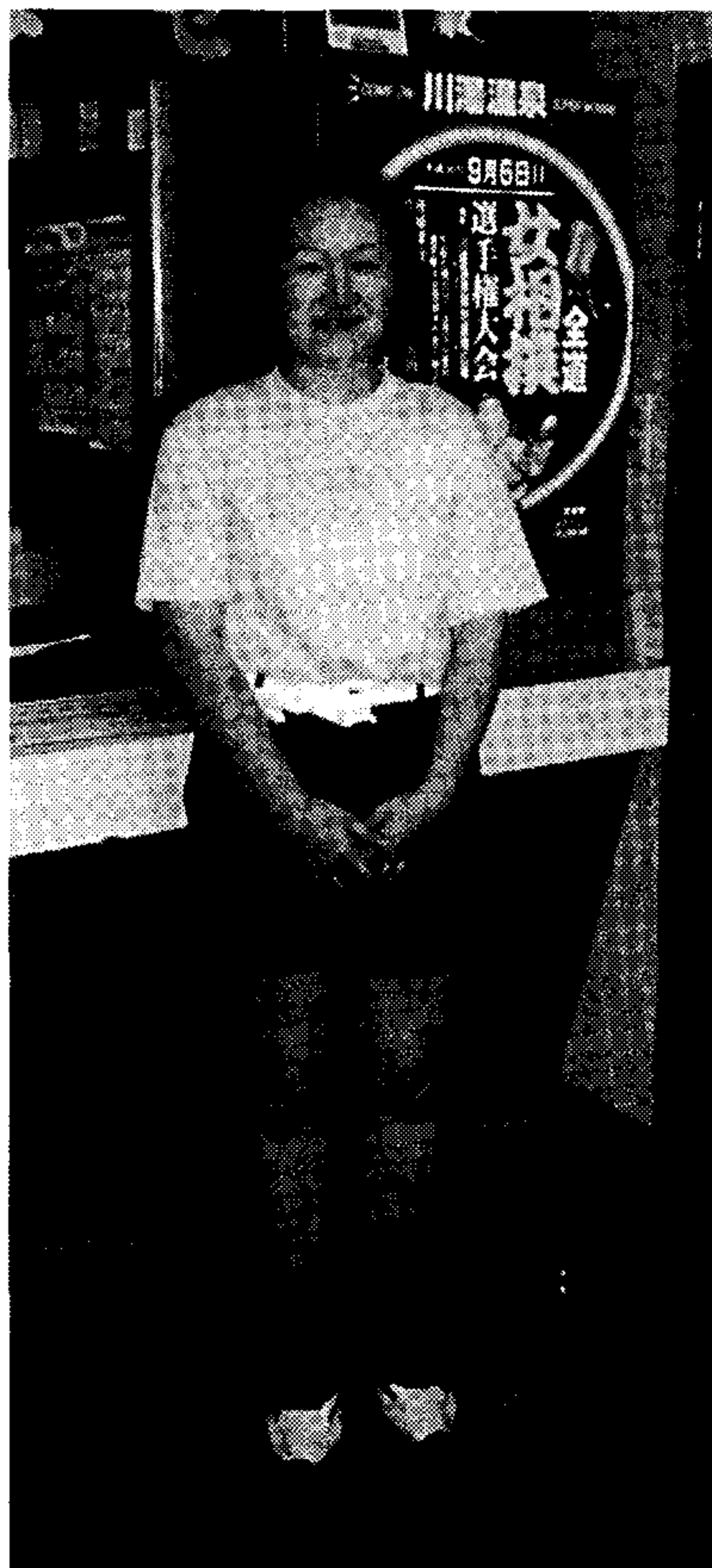
優勝者については、これまで2連覇する人はいたが、それ以上はまだ出ていない。年齢の若い選手が上がってきて世代交代が進むので、3連覇以上はむずかしいようである。参加資格は18才以上(ただし、高校生は出場できない)となっており、これまで

の最年少者は18才、最年長者は59才であった。

町の伝統行事の一つとなった感のある全道女相撲選手権大会だが、これだけ長く続いている理由は、主催者の努力もさることながら、賞金、賞品の豪華さがもっとも大きいといえるかもしれない。優勝した選手は、「こんなにももらえるなら、来年もまたがんばろう」と連覇を狙い、優勝賞金を逃した選手は、「来年こそは、私がもらう」と燃えるに違いない。上位を目指さない選手でも、記念として大会に出場しただけで参加賞金もらえるから、「ためしに出てみよう」と、思い切っ出て出る女性もいる。

しかし、こういう要素も大きいのは確かだが、大鵬を生んだ町であり、相撲を愛する多くの町民がいるからこそ実現できることである。

同じ北海道内の福島町の「女だけの相撲大会」



川湯温泉女相撲選手権大会の選手のユニホーム。ヒモをまわし代りに使っている。



特設の土俵風景。大勢の観客が見守る中試合が進められる。



第29回川湯温泉女相撲大会の結果を知らせるホームページ。  
(<http://www.masyuko.or.jp/onnazumo.html>)

について、弟子屈町の女相撲大会関係者は、「互いにそれぞれのやり方があるので、それぞれが工夫して盛り上げていけばいいのではないかと、女相撲大会では大先輩に当たるだけあって、至ってクールである。しかし、参加者の一部から要望が出ている四股名を採用するかどうかなど、福島町の大会のように、もう少し面白さを出すことも今後の検討課題だという。2001年、ちょうど新世紀を迎える年に30回目の大会となるので、関係者の間では、新しい趣向を加える転機にしたい考えだ。

いずれにせよ、新相撲が正式にスタートし世界大会も開催されるようになったことを考え合わせると、競技に力点を置いた女相撲大会が定着していることは、すばらしいことであり、今後も発展していったほしいと願わずにはられない。

## Ⅱ. 南北海道「女だけの相撲大会」

(北海道松前郡福島町)

### 1. 漁業の町・横綱の里

北海道松前郡福島町は渡島半島の南端に位置しており、青函トンネルの北海道側の入り口となっている。町の総面積の93%が山岳・丘陵地で、津軽海峡に転げ落ちるように高地が迫っているが、気候は対馬暖流の影響を受けて、年間を通じて比較的温暖だ。北海道の漁業の発祥の地として、鯨漁で大いににぎわったことは今では古老たちの懐かしい語り草となってしまったが、現在も福島町が漁業の町であることに変わりはない。また、江戸初期には、千軒岳で北海道初の砂金採取事業が行われたところでもある。

初と言えはもう一つ、福島町は全国でも初めて、一つの町から千代の山と千代の富士の二横綱を輩出した町でもある。そのため、町民の相撲熱はたいへんなもので、横綱街道や横綱橋と名づけられた道や橋、土俵をかたどったロータリーなど、町のそこかしこに「横綱の里」の雰囲気漂う。二人の横綱を記念して横綱太鼓も新たに創作され、さまざまな機会に披露されている。平成9年には

町立「横綱記念館」もオープンし、観光客集めに一役買っている。この町で毎年5月の母の日に、南北海道「女だけの相撲大会」が開催されており、その数は今年(平成12年)でちょうど10回を数えた。それを記念して土俵も新たに整備され、屋根のついた本格的な土俵となった。平成15年には、この土俵を使って全国中学生相撲大会が開催されることも決まっている。

### 2. 第1回・女だけの相撲大会の開催

漁業は一見男の仕事のように見えるが、女性の力がなくては成り立たないものである。とくに福島町ではスルメイカ漁が盛んで、スルメイカが水揚げされた後は、女性の活躍が控えている。また、水産加工場でも、元気に働く女性の姿がひととき目を引く。他方、出稼ぎ者も多く、必然的に町は女性が支えているという印象を受けることになる。

こうした土地柄もあって、福島大神宮の末社の川濯(かわそ)神社には、昭和の初期に始まった奇祭とされる「女だけの祭礼行列」が、今も伝わっている。この行事は、形の上では10年に一度行うことになっており、このときは講の女性(現在約250人)が社名旗や御神宝を持ち、その後からみこしが続き、町の中心街に繰り出す。

福島大神宮の創建は不祥であるが、天正2年(1574)に再建された記録が残っている。祭神は

歴代優勝者			
第1回大会  次郎長山(清水島子)	第2回大会  明の山(稲垣明美)	第3回大会  新山山(新山マキ子)	第4・5回大会  裕の清(松原裕美)
第6・7回大会  田辺山(田辺千乃)	第8回大会  トワイラの電巻(トワイラ・ダッツ)	第9回大会  ブーデーマイ(今井安希子)	第10回大会  田美福(吉田由理佳)

女だけの相撲大会のホームページ。綱を締めた歴代の優勝者が紹介されている。

(<http://www.masyuko.or.jp/onnazumo.html>)

天照大神と豊受大神で、どちらも女の神様である。川濯神社は福島大神宮の境内の一角にあり、創建は明応元年（1492）とされる。川濯神社にはイザナギの命（みこと）、イザナミの命、せおりつ姫の命の三神が祭られているが、中でも、せおりつ姫は世の中の罪や汚れを祓い清めるみそぎ祓いの神とされ、古来、女性の守護神として地元や周辺の女性たちから厚い信仰を受けてきた。神社の名前の由来も、せおりつ姫が川で洗い清めるということから来ている。

平成3年はちょうど川濯神社の創建500年に当たり、これを記念して「女だけの祭礼行列」が15年ぶりに行われることになった。これを聞きつけたNHKがその様子をBS放送で生中継することになり、福島町観光協会では、この機会を利用して女相撲大会を併せて開催することにした。しかし、同観光協会によると、これは突然決まったものではなく、「横綱の里」として、その2、3年前からひそかに計画を立てていたもので、その下準備として、女相撲大会では先輩格の弟子屈町の女相撲選手権大会も見学していたという。BS放送の話が持ち上がったことで、この計画が一気に実現することになったわけである。

そうはいっても、いざ実現させるとなると勝手によく分からず、観光協会を中心とした関係者の間で試行錯誤が始まることになった。

まずチラシを用意して、女相撲大会の開催を町



大相撲の巡業にも使われた本格的な土俵で、選手の取組にも熱がこもる。

民に知ってもらうことにした。それから参加者の募集を始めた。参加人数は25人を予定したが、思うように集まらず、足で訪ね歩き、「テレビでも放送するから」「賞品がもらえるから」などといって参加を呼びかけた。水産加工場には女性が600人～700人もいるので、彼女たちを中心に説き伏せて回ったが、それでも容易に集まらなかった。「恥ずかしい」「家族が反対している」などというのが主な理由で、最終的に参加人数は20人とどまった。このときは、町内を対象にした相撲大会だったが、町外からも数人の女性が混じっていた。年齢層では、30代から40代の女性が中心となった。次に関係者の頭を悩ませたのが、選手の服装をどうするかであった。相撲はまわし一つで行えるもっとも簡単な格闘技ではあるが、女性による相撲となれば話は別である。現在は主催者側で服装一式を用意し、大会終了後、各自持ち帰ってもらうようにしているが、当時は、短パンにまわし代わりのさらしを巻いたものを主催者側が用意し、上着は自前のTEEシャツを着てもらった。

土俵に関しては、さすが「横綱の里」だけあって、すでに立派な土俵が福島大神宮境内に設けられていた。この土俵はかつて千代の山や千代の富士が巡場所で相撲を取った土俵だ。ちょうど臼の底に当たるところに土俵があって、観客はぐるっと取り巻いた天然の棧敷のような斜面に腰を下ろして見物できるようになっている。しかし、当時の土俵はあまり使われていなかったので荒れており、その上怪我のことも心配されたので、土俵の上には数センチの高さでおがくずが敷き詰められた。

境内は神聖なところであるという神主の発案により、祝詞をあげお祓いをしてから試合を行うことにした。また、参加者は行列を組んで川濯神社にお参りし、御神木である乳房桧に母体の安全を祈願した。この乳房桧は樹齢500年、幹の回り全体が乳房の形をしており、この木に詣でると産後の母乳の出がよくなると伝えられている大木である。



さて、いよいよ試合開始であるが、参加者全員が相撲を取るの初めてであり、どのように仕切りをして立ち上がるのか、それすらも知らない人ばかりであった。しかし、ルールが簡単で誰にでもできるのが相撲のよいところで、行司がその都度、塵浄水から仕切り、立ち会いまで‘手取り足取り’教えて、選手同士を対戦させていった。仕切りで相手と目が合うと、笑い出したり、恐がって後ずさりする選手もいて、会場全体がなごやかな雰囲気の中であつた。4人の検査役、それに決まり手をアナウンスする人もそろえていたが、みな素人で、決まり手などはアナウンス担当者がアドリブ風にその様をうまく表す言葉で観客に告げた。たとえば、粘りに粘って相手を負かせたときには「ただいまの勝負、根性勝ちで〇〇山の勝ち」などと放送した。「この大会はイベントであり、面白くて楽しければいいのではないか」というのが、主催者側の考え方であつた。

四股名をつけることは考えていなかったが、選手たちが思い思いに四股名をつけてきたので、その四股名に従って呼び出しや勝ち名乗りを上げた。

どれだけ観客が集まるかも主催者にとっては心配の種だったが、選手の職場の同僚たちが、「私たちの代表だから」と、そろって応援にかけつける人たちもいて、予想をはるかに上回る観客が集まつた。

第1回大会では、優勝者に賞金10万円、参加者全員に参加賞として5000円が授与された。その他、この大会を知った地元の商店などが、「勝った人に賞品として出してほしい」と様々な品物を寄せてきたので、それらが賞品に加えられた。試合後、優勝者は綱を締めて土俵入りをしてもらい記念撮影をしたが、このときは地元にもともと伝わっていた綱を借りて行った。

大会を終えた参加者の感想はおおむね好評であつたが、その中でも、相撲を取ることに対して抵抗感の薄れたことがもっとも大きな成果の一つだ

つたといえるのではないだろうか。大会前には誰もが躊躇しながらの出場だったが、「次の大会にも出たい」という選手が多かったからである。これは観客も同様で、一部で言われる「女相撲は際物」などとはまったく無縁の楽しい雰囲気の中であつた。主催者は、女相撲大会を開催すれば、一度だけでやめるわけにはいかないと大会前から腹を括っていたが、こうした周囲の好意的な反応やマスコミでの評判が後押しして、毎年開くこととなつた。

### 3. 第2回以降の大会

こうして平成3年に初めての女相撲大会が開催されたわけだが、その後の大会の様子はどうだただろうか、次にその様子を見てみることにしよう。

服装は上下の着衣とも主催者側で用意することになったが、とくに上着には大会名が大きくプリントされているので、土俵に上がる選手の気持ちはいっそう奮い立つことになった。下は短パンを用意しているが、オシャレに気をつかう女性もいて、派手な模様の付いたストッキングを短パンの下にはく選手も出てきた。

賞品については、優勝者の賞金10万円はそのまま現在も変わっていないが、参加者全員に対する参加賞金は1万円にアップした。前もって参加費用として2千円を参加者から徴収しているが、これは参加を最終確認するためのものである。しかし、参加費用を払い込んでも当日辞退する人も出るので、毎回数人の補欠を用意している。

名称は南北海道女相撲大会となっているが、とくに参加資格をその範囲に限っているわけではなく、申し込みがあれば、どこから参加しても受け付けている。そのため、弟子屈町の川湯温泉の女相撲選手権大会と掛け持ちで参加する人もいて、中には福島町で優勝を逃した人がその口惜しさから川湯温泉の大会に出て、見事雪辱を果たしたことも過去にあつたという。

女相撲という競技の性格上、参加者が限られて

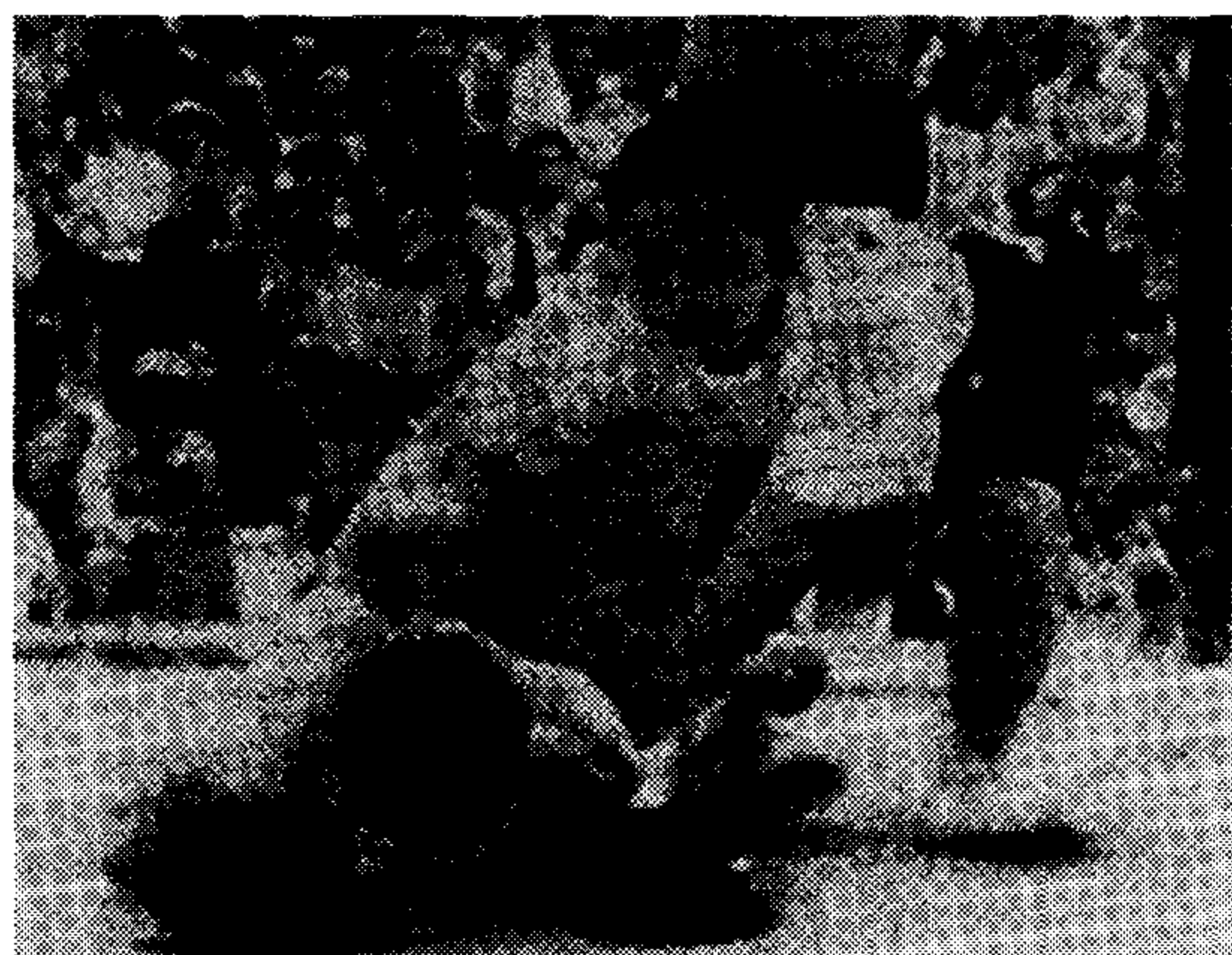
いるため、同じ人が毎年続けて優勝をさらっていくということも十分予想される。そこでこれを避けるために、連続3回優勝が続いた人には特別に名誉称号などを与えて参加を遠慮してもらうことも考えているが、現在まで連続2回が最高で、名誉称号を受けた選手はまだ出ていない。大会後、優勝者が誇らかに締めて土俵入りをする綱は町内にあったものを借りていたが、その後、地元の人の手作りによる綱が特別に用意された。

土俵は福島大神宮の土俵を第1回大会から使用しているが、荒れてきたので昨年(平成11年)大改修をして、立派なやぐらも造られた。名実ともに本格的な土俵になったので、初めて土俵上におがくずをまかずに試合を行った。試合後、選手にアンケートを取ったところ、賛成と反対が半々となったが、賛成では、足が滑らなくていいというもの、反対では、硬くて倒れたとき痛かったというものが、主な意見だった。

大会の総費用は約180万円、そのほかに会社や商店などからの提供の品々があり、それを金額に換算すると100万円ほどになる。

怪我も心配されるところだが、これまで、肩や指の骨を折るなどの怪我をした選手が出た。大会前に一括してスポーツ保険に入っているが、この保険を超える負担については、各自に負担してもらっている。しかし、これに関して、これまで苦情は寄せられていないという。

大会を始めた頃は参加者集めに苦労したこともあって、応募者が募集人員を上回り、「もう、締め切りました」と参加を断るようになることが主



迫力ある大会の様子(平成十一年五月十日付け朝日新聞より)

催者のいわば‘夢’となっていたが、その夢は第7大会のときに実現した。

行司は一般的なアマチュア相撲の服装ではなく、大相撲の行司の服装で試合を裁いている(アマチュア相撲では行司といわず主審というが、この大会では同様に行司と呼んでいる)。

検査役は4人つくが、第1回大会のときはすべて素人だった。しかし、選手の真剣な取組に応えるため、2回大会以降、4人のうちの1人にちびっこ相撲の指導者が加わるようになった。判定が微妙なときはもちろん検査役が物言いをつけるが、ほとんど同体のような場合、行司が「今のはどっちだかわかんねえな」と頭をひねりながら、どちらにも軍配を上げず、検査役に判定を委ねる場面もある。さらには、選手自ら近くの検査役に物言いを要求することもある。検査長がマイクで判定の説明をするのは、大相撲と同じである。取り直しの判定が出たときなど、選手が「もう、疲れた」などといいながら再試合に望むので、思わず観客の笑いを誘う。万事、真剣な中にも、和やかな雰囲気を取組は進められるのである。

#### 4. 取組の様子

取組は第1回大会からトーナメントで行われている。最近ではそのほかに、相撲競技に慣れるためにトーナメントの前に「花相撲」と称する2人勝ち抜き戦や3人勝ち抜き戦を行っているが、このとき勝った選手にも豪華な賞品が渡される。トーナメントだけでは、初戦で敗退した選手はそれで試合が終ってしまうことになるが、花相撲があるため、少なくとも2回は試合に出られることになる。

選手が土俵に上がり、仕切りから立ち会いまで、行司が一つ一つその動作を教えながら対戦させるのは、何回大会を重ねても同じであるが、これも、年に一回の催しなのだから、仕方のないところである。

塩を撒く動作一つにしても、その撒き方がわからず、土俵の外へ撒く選手もいる。行司が、「塩



は土俵の中に撒いて清めるんですよ」と注意し、観客からも笑いが起こる。当人は頭を掻きながらもう一度試みるが、今度もうまく撒くことができず、再び観客から笑いが起こるといような場面も少なくない。

仕切りにしても、両足をそろえるということができず、徒競走のように足を構える選手も多い。そのときはすかさず行司が「かけっこじゃないんだから、両足はそろえて！」と注意する。

女子相撲に限らず一般の相撲でも、仕切りから立ち会って両選手が取り組むまでがもっとも息を呑む瞬間であるが、この点、行司の土俵裁きの巧みさには感心させられる。立ち会いまでの行司の掛け声は決まっているわけではなく、まさに臨機応変に掛け声を変えて立ち会わせる。「はい、腰を下ろして→手をついて→腰を上げて→はっけよい→のこった」「構えて→はい、これが仕切り線ですよ、これに両手を揃えて→腰を上げて→はっけよい→のこった」「はい、シットダウン→ハンドダウン→レディーゴー」（これは、カナダの選手が出場したとき）というような調子で、次々と取組を進めていく。決勝戦では、互いににらみ合っているときに、「これに勝つと10万円、10万円ですからね」と選手にささやき、緊張を解くのも忘れない。この行司役には第1回大会からずっと同じ人が務めており、名物行司として大会には欠かせない人となっている。

試合は全体的に短時間で決着がつく。相撲は押しが基本であるが、押すよりも引っ張って相手を引き倒そうとする選手が多く、互いに引き合ってくるくる回る場面も多く見られる。中には終始押し通す選手もいて、土俵際まで押していくが、腰が下がっていないため、くるっと相手に回られて先に土俵を割ってしまう選手もいる。体重別でないため、大きい選手と小さな選手が対戦するときなどは、立ち上がった瞬間、小さな選手が「うわっ」と声を上げて自分から後ろへ倒れることも過去にはあった。ほとんど勝負のついている体勢になっても力を抜かず、最後まで逆転を試みる場面

もよく見られるが、むしろ怪我が心配されるところである。

しかし、準々決勝あたりから、試合内容はまとまってきて、土俵中央でがっぷり四つに組み合う試合も出てくる。そんなときは、思わず観客も手に汗を握り、家族や友人からは盛んに声援が飛び交う。上手投げや押し倒しなどの決まり手で勝負がつくようになり、見ごたえのあるものが多くなる。

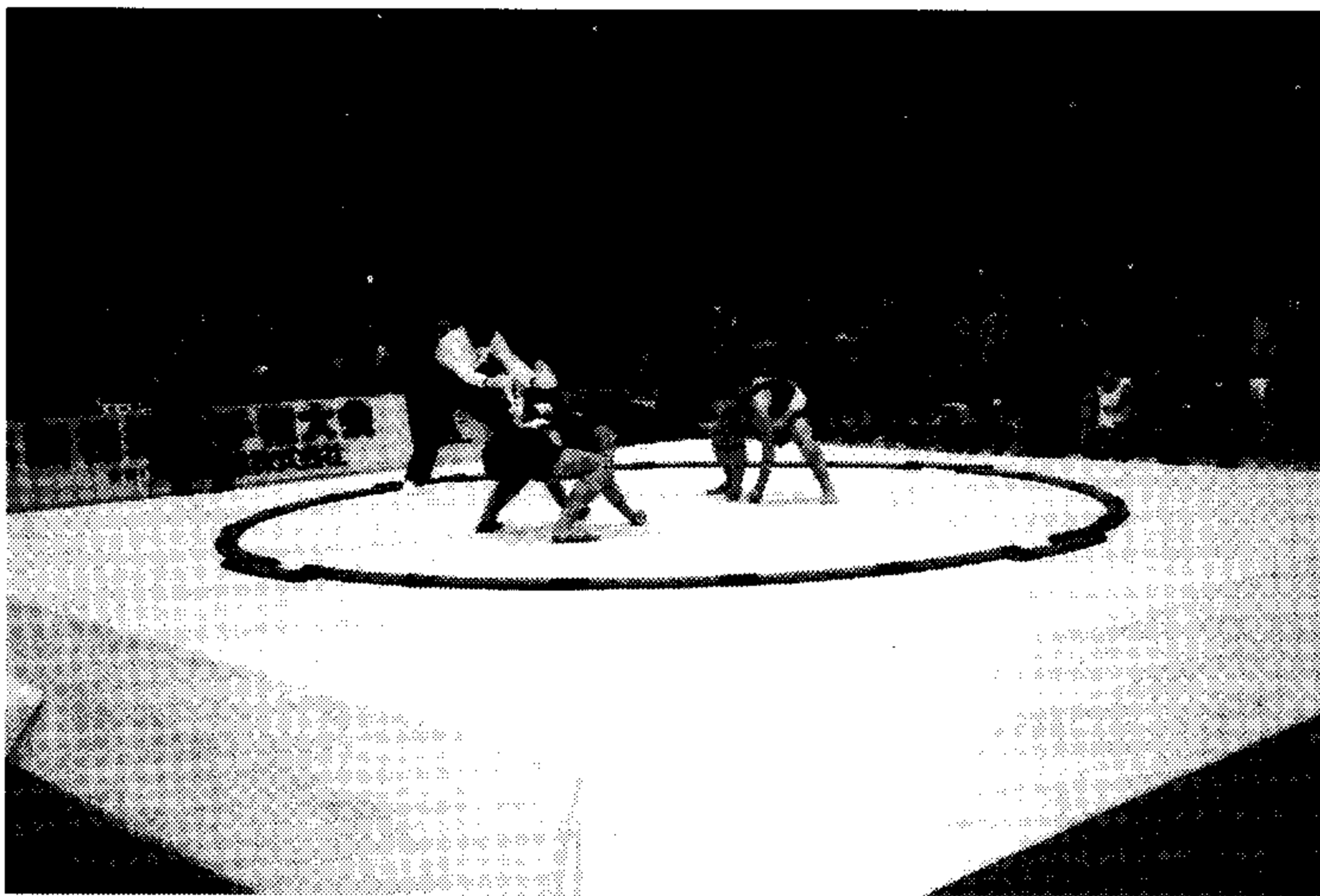
全体的に見ると、少し工夫すれば勝てるような状況になっても、自分から転げてしまうような場面もあり、端から見ているとこっけいに見える取組も少なくない。しかし、普段相撲を取ったことのない女性ばかりなのだから、これも仕方のないことではある。それに、当の本人たちは真剣そのもので、無我夢中で一生懸命相撲を取っているのはいうまでもない。その証拠に、負けて家族や仲間のところに戻ると、悔し涙を流す選手もいる。反対に、「去年まで一度も勝てなかったが、今年一つ勝つことができ満足している」と喜ぶ選手もいる。

試合をする当人たちのこうした気持ちと、観客（あるいは、楽しく面白く行いたいという主催者側）とのギャップが、この大会の特徴の一つといえるかもしれない。また、出場する選手は誰もが明るくはつらつとしており（もちろん、体の大きな選手がほとんどだが）、選手たちが繰り広げる熱戦を観戦していると、現代女性がもっとも嫌う「デブ」や、流行となっている「ダイエット」とはまったく無縁の世界に身を置いているのではないかと思われてくる。むしろ、体が大きくはつらつとした女性がうらやましくさえ思えてくるのである。まさに、女性が主役の町、福島町ならではの南北海道「女だけの相撲大会」だといえるのではないだろうか。

## 終わりに

「女相撲大会」の開かれている弟子屈町と福島町の二つの町は、ともに女性の活躍が著しいことが共通点となっている。新相撲が始まった理由の一つにも、女性の社会進出の国際的な高まりがあり、相撲を含めた格闘技に対する女性の欲求は、今後ますます高まっていくことが予想される。こうした潮流をしっかりと汲み取って、競技人口を増やしていくことが、新相撲のもっとも重要な課題であろう。

女性が相撲を取るということに対する社会的な認知度は、まだ十分とは言えない。しかし、北海道の二つの大会を通して感じられることは、女性による相撲が、選手はもちろん、観客にとっても違和感なく受け入れられ、競技として楽しめるということである。したがって、この点においても二つの大会は、新相撲の今後の発展に関して、多大の示唆を与えるのではないかと思われる。



第3回全日本新相撲選手権大会。観客は北海道の大会よに及ばないが……。